

学位論文審査の結果の要旨

1. 申請者氏名	鈴木 薫
2. 審査委員	主 査：（岡山大学教授） 三村由香里 副主査：（岡山大学教授） 伊藤 武彦 委 員：（岡山大学教授） 松枝 睦美 委 員：（岡山大学教授） 上村 弘子 委 員：（滋賀大学教授） 大平 雅子
3. 論文題目 養護教諭のコーディネーション行動における間接支援モデルの構築	
4. 審査結果の要旨 論文提出による学位申請者 鈴木 薫から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。 論文審査日時：令和7年1月13日（月） 14時00分～14時45分 場所：岡山大学教育学部 東棟2階 1211室 1. 学位論文の構成と概要 第1章 養護教諭のコーディネーション行動における間接支援モデルに関わる要因の尺度作成 養護教諭のコーディネーション行動の推進のために必要な、「養護教諭のコーディネーション行動」「養護教諭の自己効力感」「養護教諭の柔軟な役割指向」の3つの要因について、それぞれの測定尺度を作成した。養護教諭はコーディネーションを個別支援とシステムの二つのレベルで捉え、個別支援コーディネーションは健康相談のプロセスと一致していること、養護教諭の自己効力感、専門職として学校内外に働きかける機能面の効力感について理解する必要があること、養護教諭の役割を柔軟に捉えて思考し行動する目的は、児童生徒支援を促進させることを明らかにし、モデルの検証に用いる尺度を得た。 第2章 養護教諭のコーディネーション行動における間接支援モデルの検証 先行研究で構成した間接支援モデルの検証を行った。前章で作成した尺度を活かし既存の5つの要因の尺度を加えて、公立小中学校の養護教諭（有効回答 695名）のデータを共分散構造分析により検討した。モデル全体の適合度及びモデルの部分評価はおおむね良好な数値を示し、間接支援モデルの妥当性が確認された。養護教諭のコーディネーション行動は、プロアクティブパーソナリティとキャリア年数に弱い影響を受け、児童生徒のニーズに気づく段階から行動の遂行を動機づける段階を経て、個別支援コーディネーション行動とシステムコーディネーション行動を生起するという因果関係を明らかにした。ニーズに気づく段階に影響する要因は、専門職としての自律性や学校組織的要因（同僚との信頼関係、校長のリーダーシップ、協働的職場風土）、行動を動機づける段階に影響していたのは、役割に対する自己効力感と役割を柔軟にとらえる志向であった。養護教諭としての自律性が起点となり、自律性と職場環境、自己効力感と柔軟な志向に伴う有用感のように、それぞれの段階に学校組織に関わる要因が伴うことで、行動生起のプロセスに強く影響を及ぼしていることが明らかになった。 さらに学校組織的要因が、養護教諭の学校全体の支援への関わりを左右する可能性が示された。	

第三章 間接支援モデルの発展的検討

モデルの検証結果をキャリア年数に着目し、発展的に検討した。役割に対する自己効力感と役割を柔軟にとらえる志向や、個別支援とシステムのコーディネーションといった要因の尺度得点において、年数とともに徐々に向上する傾向に見られた。一方、各キャリア年数の共通点が、職場における協働意識、児童生徒に対する受容的態度、教職員や保護者との信頼関係の構築や全校児童生徒の情報収集・情報共有、支援チームの形成行動に関わる因子の下位尺度得点において高得点を示し、中程度の相関関係をもつ傾向に見られた。また低得点傾向を示す、協働的な支援体制づくりや支援の推進、及び支援システムのマネジメントに関する意識や行動においても、中程度の相関をもつ傾向が見られた。さらに、キャリア年数と共に高まるコーディネーション行動に注目し、行動の結果の捉え方と動機づけの関係について調査した。その結果、成功経験は管理職からの信頼や協働的な学校組織など、学校の支援体制のよさや養護教諭自身の努力に起因すると捉えていること、成功経験や管理職・教職員・保護者等からのフィードバックを受けることが自己効力感や有用感を高めることが確認された。

終章では、第1章から第3章までの研究成果を踏まえ、養護教諭のコーディネーション行動を促進するための、組織マネジメントのあり方について述べた。養護教諭の資質や意識の向上は言うまでもなく、チーム学校における教員集団を作るための管理職の役割、OJTによりその組織を協働して作ることの必要性などを提案した。また、そのためには養成段階や研修における、職種やキャリア段階に応じた適切な内容を明確にすることの必要性を述べた。

2. 審査経過

本研究は、養護教諭の小学校・中学校におけるコーディネーション行動の生起プロセスとプロセスに関わる要因を解明するとともに、行動を促進する要因やコーディネーション行動生起におけるキャリア年数による特徴について明らかにすることにより、コーディネーションの一層の促進や、養護教諭を活かす組織マネジメントに寄与することを目指すものである。養護教諭は、心身に健康課題をもつ児童生徒の訴えに対する苦痛の緩和を行いながら、身体的、心理的、社会的側面からアセスメントすることにより状況の見極めや支援の方向性を判断し、担任や保護者、支援協力者への間接支援を進めている。このような間接支援は、複雑化・多様化した課題を学校が組織的に解決するために必須であり、養護教諭には、学校内外の多職種をコーディネートする役割が期待されている。しかし、養護教諭のコーディネーションに関わる実態は明らかにされておらず、そのため、その資質・能力を向上させるための養成教育や研修について開発することができていないのが現状である。今回の研究により、養護教諭のコーディネーション行動は、プロアクティブパーソナリティとキャリア年数から影響を受け、児童生徒のニーズに気づく段階から行動の遂行を動機づける段階を経て、個別支援コーディネーション行動とシステムコーディネーション行動を生起するという因果関係を明らかにした。また、ニーズに気づく段階に影響する要因としては、専門職としての自律性や同僚との信頼関係、校長のリーダーシップ、協働的職場風土などの学校組織的要因、行動を動機づける段階に影響していたのは、役割に対する自己効力感と役割を柔軟にとらえる志向であった。これらの要因についてのキャリア年数別の検討では、養護教諭の自己効力感や柔軟な役割指向などキャリアとともに高まるものがある一方で、必ずしも経験により高まらないものも見られた。キャリア年数と共に高まるコーディネーション行動は、行動の結果の捉え方と動機づけと関連し、コーディネーションの成功経験は管理職からの信頼や協働的な学校組織など、学校の支援体制のよさや養護教諭自身の努力に起因すると捉えていること、成功経験や管理職・教職員・保護者等からのフィードバックを受けることが自己効力感や有用感を高めることが確認されている。これらの結果は、今後の養護教諭のコーディネーション行動を促進するための資質向上や、養護教諭が組織マネジメントに関わるための研修に関しての研究を進展させていくことが期待できると同時に、学校組織マネジメントとしての管理職の資質への言及にも寄与するものと考えられる。

3. 審査結果

以上により、本審査委員会は 鈴木 薫 の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。